現代中国の書家二十人を紹介する不定期連載

中国当代書家二十人

第4回

孫伯翔

監修／蘇士澍　取材・文／郭同慶

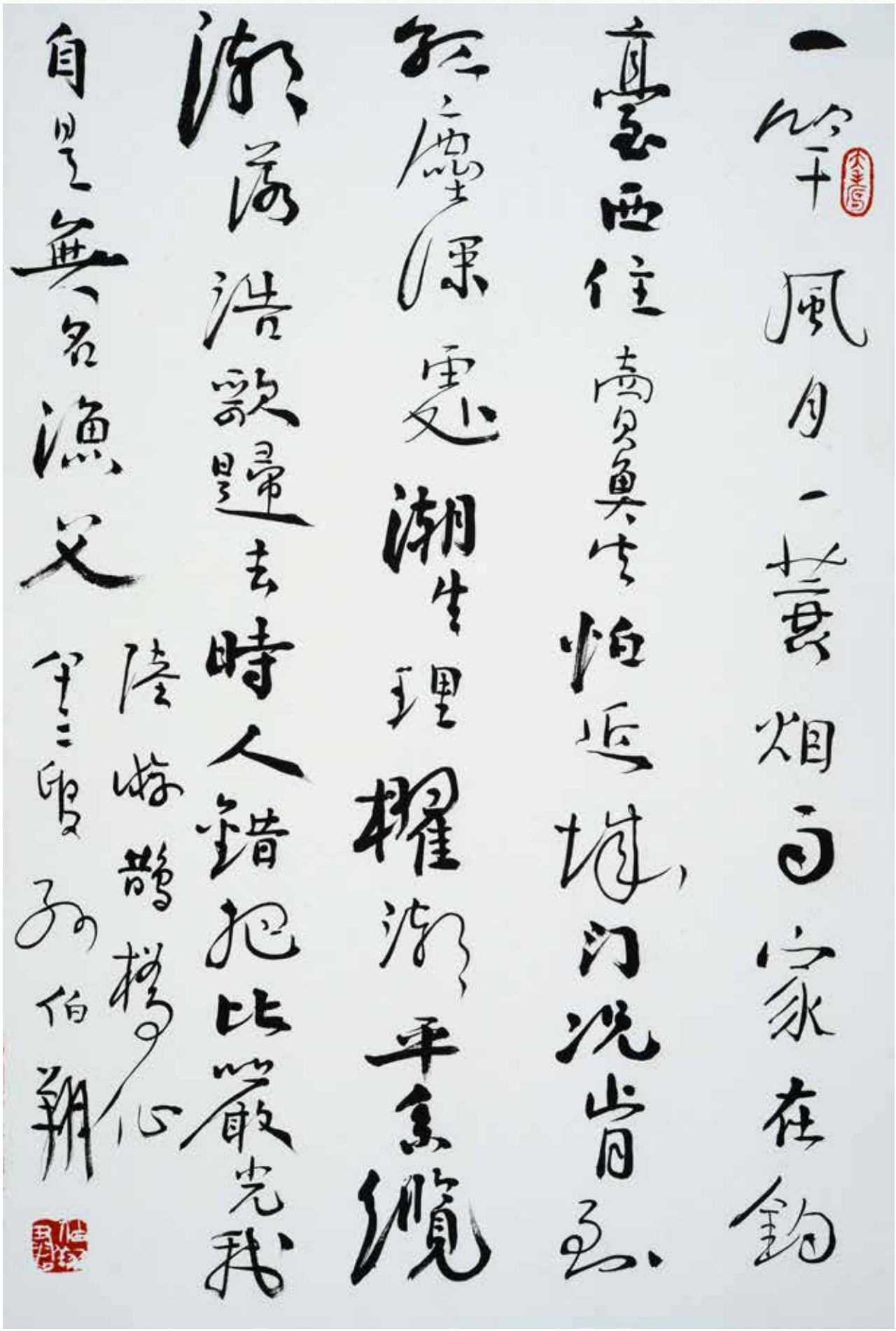
孫伯翔

そんはくしょう

一九三四年、河北省生まれ。中国書法家協会理事、同創作審査委員会委員、天津市文学藝術界聯合会委員、天津市書法家協会副主席などを歴任。天津人民美術出版社で《孫伯翔書法藝術》《孫伯翔書法集》《孫伯翔書画集》《孫伯翔書画作品集》などを出版

中国書法家協会理事の孫伯翔氏は、王学仲翁に師事した現代の六朝書の巨匠である。軟硬違いの色々な筆の試用し、正側鋒使いの様々腕運びを模索し、数年間を掛けて試行錯誤を重ねた結果、前人未到の境地に辿り着いた。二〇一五年に中国政府により、第五回中国書法蘭亭賞の終身賞に選出された孫氏を、郭同慶氏が取材した。（編集部）

中国当代4.indd 84　2018/06/01 22:25



00×00　0000年

中国当代4.indd 85　2018/06/01 22:25

当代「六朝書」の巨匠 孫伯翔

碑学の流れを継承

中国書法の発展史において、満州族が統治した大清王朝は、漢民族の儒学者や金石書画研究者がどの時代によりも漢民族自身の古来文化を大事にした特別な時代だった。清朝後期に各国の考古隊が中国入りを刺激剤とし、敦煌石窟の発見や殷墟遺跡の発掘により、考古学や文字学の研究が盛んになった。書壇では、劉熙載、阮元、包世臣、康有為、張裕釗、楊守敬の提唱による碑学研究が著しく盛行し、六朝書風が大流行した。書道史に名を深く刻む六朝書大家が輩出して、日本でも趙之謙、張裕釗、沈曾植、于右任など、馴染み深い人物も多い。その碑学の流れを継承し、かつその理論研究および創作の実践として、前人未到の境地に辿り着いたのが、現在、天津に住む「六朝書」の巨匠・孫伯翔氏である。

筆者は先日、孫伯翔氏を取材した。

書道に全うする中青年人生

孫伯翔氏は、一九三四年十一月に河北省武清県（現在の天津市武清区）大黄堡の先祖代々がやや広大な畑を耕してきた農家孫家の初孫・長男として生まれた。祖父母に寵愛された伯翔は私塾に送られた。塾長の邱敬川先生は大黄堡で一番、二番に数える国語や書が得意とする達人だった。国語の入門篇で《三字経》、《百家姓》《千字文》読み書きは勿論、上級の《大学》、《中庸》《論語》《孟子》等を大きな声で朗読や筆字で抄写させられた。また、欧陽詢や顔真卿にも触れ合った。言わば、邱敬川先生は孫伯翔の国語基礎作りや書道の基本を仕込んでくれた啓蒙の師だった。書家になる夢はその頃に既に芽生いたそうだ。

一九四九年十月に新中国が誕生し人民の時代が到来した。一九五〇年六月に中央人民政府が《土地改革法》公布した。地主の土地は没収され、土地を持ってない貧民に分配した。「土豪を打倒せよ、田んぼを分けよ」という横断幕やポスターが町村あちらこちらに飾られた。大黄堡で広大な畑を持っていった孫家は「地主」と認定され、闇の運命に直面された。青年に成ろうとした孫伯翔は「地主の子」と差別視され、高校や大学へ学習進路まで不等な扱いを遭遇した。幼い頃から儒学を叩き込まれた青年の孫伯翔は志は高し、忍耐力や柔軟性の持ち主だった。やむを得ずに進学を断念し、親の友人の助けで天津でサービスに就職した。大切な仕事を真面目に取り込む孫伯翔は地主家の出身で幾ら頑張っても出世するチャンスは巡り込んで来ない。今度は出世も断念し、余暇の時間を書道に全うした。

独学で唐代の楷書大家である欧陽詢、褚遂良、虞世南、顔真卿を繰り返し臨書した。「不惑」の年なる頃に既に地元で頭角を現れ、知名度が出始めたのだ。

王学仲翁に弟子入り

しかし、真の書家を目指した孫伯翔は独学で限界を感じた。

一九七三年に長年憧れの王学仲翁（一九二五―二〇一三）に出会い、直ちに弟子入りを果たした。

王学仲翁といえば上野駅構内で強大なタイルに焼き付けた壁画で日本には八〇年代から馴染みのある大家だった。天津書壇の大御所であり天津大学教授であった。

王学仲翁の自宅を通う孫伯翔氏は言わば「碑学」の本家に入門したのだ。師匠の師は徐悲鴻（一九八五―一九五三）であって、徐悲鴻の師に碑学研究をリードした康有為がいった。康有為（一八五八―一九二七）は日本とも係わりが深い清朝末に光緒皇帝を巻き込んだ「戊戌変革」で百日維新を起こしたリーダであった政治家であり、清末遂一の儒学者であった。晩年に《広芸舟双楫》を執筆したほど書法を傾愛した。碑学研究を積極的に提唱し「六朝書の十の美」を主張した。門

現在は天津市に居を構え、書室で筆を揮う孫伯翔氏

中国当代4.indd 86 2018/06/01 22:25

00×00　0000年

00×00×2　0000年

中国当代4.indd　87　2018/06/01　22:25

下に徐悲鴻や劉海粟、王遽常、蕭嫻などの大物がいった。特に徐悲鴻には《鄭文公碑》《石門銘》《張猛竜碑》などの研究を指導した。そして、徐悲鴻は中央美術学院で書画を専攻した王学仲にその碑学重視の思想を伝授した。徐悲鴻学長の遺志を継承した王学仲は一九五五年に雲岡石窟、竜門石窟を現地調査し、持参する拓本と原石碑を照らし合うほど真剣に取り込んだ。その後、天津大学で数十年を掛けって碑学即ち六朝書を研究や模索を続けた。その恩恵を一番に受けたには幸運な持ち主である孫伯翔であった。

六朝書に深漬け——独自の書風を歩き出す

孫伯翔氏は取材に対して「私は王学仲先生に永遠に感謝しています。先生が正しい勉強の道を教授してくれた。」と振り返った。

孫伯翔は其れまでの唐代の楷書を臨書した作のレーベルは師より肯定されながらも、六朝書の研究や竜門石窟の宝庫に根を下ろせと命じられた。王学仲先生が所蔵する龍門石窟の拓本を広げながら、龍門の魅力、各造像の特徴を細かく解説してくれた。そして、貴重な陽刻作《始平公造像記》に重点を置くようにと研究方向性を定めていただいたのだ。

《始平公造像記》は太和二二年（四九八年）に蒙達が撰文、朱義章が書写した龍門二十品の代表作である。南朝（四二〇—五八九）書壇で王羲之の影響が大きい、艶美で腰弱い書風の流行に対して、北魏の書人が高らかに喝を入れた方筆であり陽剛の美を持つ一品である。清末以来、チャレージする書家が少なくないが、厚い難しい壁に殆ど跳ね返られて辞退した。窮地に強い孫伯翔氏は退却がしない。軟硬違いの色々な筆の試用し、正側鋒使いの様々腕運びを模索し、数年間を掛けて試行錯誤を重ねた結果、前人未到の境地に辿り着いた。孫伯翔氏は最終的に柔軟な長鋒羊毛を以って強健陽剛の美を表現しながら、長鋒且つ軟質な筆によってその六朝書風は柔らかさも兼ねるし、線の流動性も生まれ始めた。

その成果は師の王学仲先生に高く肯定されたのだ。

その成果を以って作品を発表する機会が巡られた。一九八一年に《書法》雑誌社が主催した第一回全国書法展で四連幅の《文天祥五言古詩・正気歌》で一等賞を奪冠した。数十年の黙々とした研鑽人生は転機を迎えた孫伯翔は一夜で全国に注目される六朝書の大家になった。その後に孫伯翔氏はぶれずに六朝書の研究範囲を広げた。龍門を基盤とし、また各種摩崖に潜心、碑碣に研鑽、そして墓誌の尋趣、行草の筆意も積極的加え、何時の間に独自の書風が確立され、当代一の六朝書の旗手になった。

二〇一三年に北京の中国美術館で書歴七十年を記念する盛大な個展を開催した。同年末に浙江省の要請を受けて、浙江省美術館で巡回した。取材中で、今年の十月に再度に北京の中国美術館で個展を開くと孫伯翔氏は告げる、また厚い作品集のゲラも拝見させて戴いた。

影響と貢献

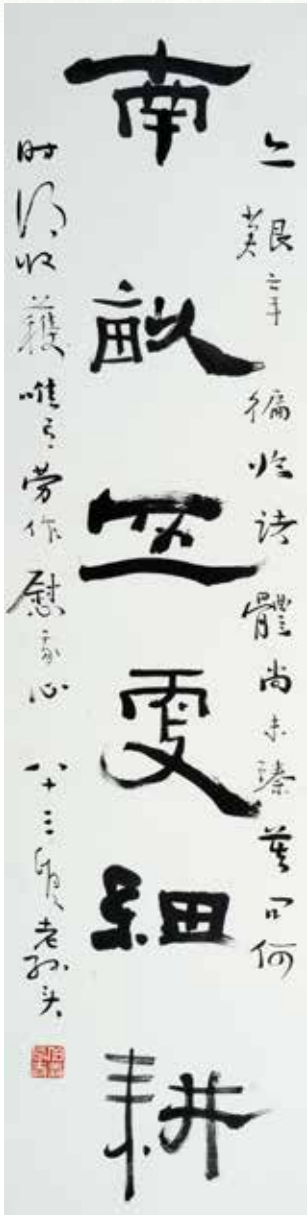
文化大革命（一九六六—一九七六）後の四十数年間の中国書壇を客観的にみると、日中国交正常化の一九七二年以降の書道交流による日本の戦後各種書風の影響も否定が出来ない。中国で現代書道の旋風まで起っているもよく話題に乗る。然し、各種古典の研鑽ブームも次々と起き、勿論二王（王羲之、王献之）ブームや王鐸ブーム、傅山ブーム、米芾ブームなどが起きていった。その中で、孫伯翔氏及び追遂者の影響で「六朝書ブーム」は著しく起っていったことははっきり言えよう。私は各省の書家と触れ合う際によく孫伯翔氏弟子や追遂者に出会う。また、彼らの力作は平繁に各種全国展や地方有力展に入賞や入選されるし、書画収蔵家たちにも非常に好まれている。六朝書は清末の包世臣、康有為、張裕釗、楊守敬らの提唱により書道人に重視され、また、王学仲翁や孫伯翔氏はその衣鉢を継承し、発展させた結果今日の繁栄をみることが出来た。

孫伯翔氏は、二〇一五年一月八日に中国政府に表彰

師・王学仲（左から二人目）と孫伯翔（左から三人目）（〓年頃）

席上揮毫する孫伯翔氏（〓年頃）

中国当代4.indd 88 2018/06/01 22:25



00×00×2　0000年

00×00　0000年

された。政府が三カ年に一度に批准し、中国文学藝術界聯合会と中国書法協会が共同主催する第五回中国書法蘭亭賞の終身賞（文化功労賞に類似するもの）に孫伯翔氏や周慧珺氏（一九三九年より中国書法家協会前副主席、上海書法家協会前主席）が選ばれた。

因みに同賞歴代受賞者は下記の通りになります。第一回は啓功、潘主蘭。第二回は沈鵬（この連載の二人目）、王学仲、李鐸、欧陽中石。第三回は劉江（この連載の三人目）、孫其峰、沙漫翁、姚奠中。第四回は尉天池、陳方既、劉藝。第六回は高式熊氏（この連載の一人目）と張海氏（中国書協前主席）と共に受賞した。今年四月十八日に第六回中国書法蘭亭賞授賞式式典は紹興市蘭亭博物館で盛大に行い、私も中国書法家協会に招待され、式典に参列した。

孫伯翔氏は、中国書法家協会理事、同創作審査委員会委員、天津市文学藝術界聯合会委員、天津市書法家協会副主席などを歴任。天津人民美術出版社で《孫伯翔書法藝術》《孫伯翔書法集》《孫伯翔書画集》《孫伯翔書画作品集》などを出版。

郭同慶　かく・どうけい

書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に来日。王蘧常、銭君匋、蕭春海に師事。二〇一四年度に上海（朶雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で《墨海一粟》作品集を出版。翰墨書道会長、東京藝術院長、東京海派書画院常務副院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、豊道春海顕彰会顧問、（公社）日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、上海呉昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王蘧常研究会常務理事、上海（玉佛禅寺）覚群書画院画師などを兼ねる

中国当代4.indd　89　　2018/06/01　22:25